



書評

[評者]

下野 太郎

大阪公立大学大学院准教授
放射線診断学・IVR 学

ジェネラリストと学ぶ 総合画像診断

臨床に生かす! 画像の読み方・考え方

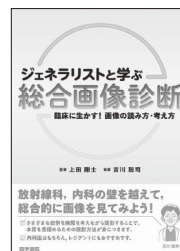
上田 剛士 監修

吉川 聡司 執筆

●B5 頁240 2022年10月

定価: 4,400 円 (本体 4,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04964-1] 医学書院刊



著者の吉川聡司先生は、放射線診断医と内科医の両方をきわめて高次元でなされている大谷翔平選手のような医師です。私は密かに、吉川先生が本を書いてくださらないかと期待していました。上司の勧めで書かれたということですが、そのご慧眼に敬服します。

私は、今まで書評依頼は原則引き受けませんでした。しかし、今回はこのような機会を与えてくださったことを心から光栄に思います。

本書では、診断すべてに応用がきく画像診断を学べます。

最初に強調しますが、総論I「画像診断の考え方」は、必ず目を通してください。ここに画像診断学の真髄が書かれています。この真髄は各論を読み進めていけば、理解し技術として習得することができます。

各論目次では13症例しか扱っていないように見えますが、提示症例と関連する病態、あたかも病気のように見える正常画像、豊富な胸部単純X線練習問題など、軽く50症例を超える経験が得られます。放射線診断を生業にしている私にとって、かなり難渋するものまで網羅しています。各章の冒頭にあるQRコードから書籍掲載画像より鮮明で全体が見られる画像を閲覧できます。解答を見る前に閲覧されると、より実践的な眼力が付くでしょう。

応用がきく画像診断を習得するためには、放射線画像の成り立ちの理解が大切です。こういった成り立ちの解説は、読むのを端折りたくなるものですが、本書では実際の読影にいかに役立つかがよくわかるように、非常に工夫して解説されています。

また吉川先生は、単純CTの重要性を繰り返し強調されています。つつい派手で見やすい造影CT画像に目が行きがちになりますが、単純CT所見が最も診断の根拠になります。なぜなら、造影CTは造影のタイミングや患者様の血液循環状態などにより、一定の画像を得られず解釈に幅が生じてしまうからです。最も普遍的な事実として単純CTの情報を活用することが、画像診断の上達への道と考えています。本書を読まれた後に、吉川先生の最近のお仕事[PMID: 35529424]を読むと、吉川先生のセンスの素晴らしさと単純CTの重要性がよりわかることでしょう。

学生にも画像診断を教えている立場から1つだけ言わせていただくと、画像の解説に関してもう少し問題となっている部位がわかるような印を多めに、かつ、図と本文中の解説文章が近い箇所に掲載されていたら、初学者にもよりわかりやすかったのではないかと思います。

本書を読み、自分自身が画像診断医目線のみで、臨床医としてどういった点で至らないかに気付くことができました。吉川先生に深謝いたします。毎日のカンファレンスでこのようなレクチャーをされ続けているとのことなので、私も参加して教えるを請いたいです。

最後に、総論II「診断するということの考え方、画像検査の使い方」やCase1で述べられているような画像検査依頼を各科の先生方がしてくださると、放射線診断医として依頼医の想像以上により良いサービスが提供できると思っています。